

日産科学振興財団 理科／環境教育助成 成果報告書

回次：第 **3** 回 助成期間：平成18年11月1日～平成 **19**年10月31日

テーマ：地球環境にやさしい学校づくりをめざして

氏名：山川勝久 所属：平塚市立大住中学校

1. 課題の主旨

地球環境にやさしい学校をめざし、限りある資源の有効活用、環境負荷の軽減、保全に取り組むことによって、環境問題は大人の一部の人達で解決する課題ではなく、自分たちの問題という視点で、生徒及び家庭、地域にも浸透させたい。具体的には、生徒会環境委員会が中心となり、大住クリーン作戦や日常の学校生活におけるリサイクル活動や環境負荷の軽減に向けた具体的な取り組み等を行いたい。

また、負荷の少ない循環型社会を目指し、資源ゴミのリサイクルや郷土の環境美化など、自分たちができる所から取りかかろうとする実践的な姿勢を生徒に身に付けさせるとともに、学校で実践している環境教育の成果を家庭や地域にも広げつつ、相互の協力体制のとれる方法等を模索していく。

2. 準備

- 1) スローガンの検討
- 2) 大住クリーン作戦実施のための教材準備
- 3) 生徒会環境委員会の年間計画の検討と策定
- 4) 家庭や地域との連携のあり方を探る組織の位置づけと実践の計画
- 5) 平塚市わかばISO外部審査への対応
- 6) 学校全体としての年間を通したリサイクル活動や省エネ対策の計画と実施、教材等の準備

3. 指導方法

- 1) 生徒会環境委員会を中心とした大住クリーン作戦やリサイクル活動、環境負荷の軽減に向けた取り組みについて検討し、年間計画を立案させ、実施に向けて学級ISO係を組織し、指導を行っていく。
- 2) 職員組織については、管理・情報部を中心に地域や家庭との連携を含め、生徒の指導を行っていく。
- 3) 平塚市環境ISO14001の一環としての「大住中学校わかばISO」の取り組みを継続し、外部審査を受け入れながら改善すべき点は積極的に見直し、より工夫した取り組みが行えるよう全生徒に考えさせ、実践させる。
- 4) 家庭への環境問題の広がりについては、全生徒に夏休みに課題を与え家族も巻き込みながらの取り組みを考えさせ、実践できるようにする。
- 5) 地域への取り組みは、地元自治会や地元外部団体との連携を行い、生徒の自主性を育てながらボランティア活動を推進する。
- 6) 日々の清掃活動の状況調査と効率的な推進を職員の指導の下、生徒の意識を高めながら行っていく。

4. 実践内容

- 1) 「みんなでやろうISOあなた次第で地球は変わる」のスローガンの下、全生徒・職員で取り組みを始める。
- 2) 第1回～第3回大住クリーン作戦の実施(平成18年12月、平成19年3月・8月実施)
学校の敷地内、周辺道路、用水路などの落ち葉やゴミ拾いを環境委員、ボランティア生徒、職員で実施。
- 3) 暗くて汚かった通学路の「城所地下道」の壁画の制作について地元自治会から学校へ協力要請があり、学校と地域が共同で平成19年4月と8月に計画し、計6日間かけて立派な地下道美術館を完成させた。
- 4) 地元の福祉協議会のご指導と協力で、生徒達が地元の環境を良くするというテーマを掲げ、何回も会合を重ねながら19年8月21日に「鈴川の清掃ボランティア」を計画・実施し、当日は約60名が参加した。



- 5) 地域自治会の協力と支援を受けながら親子による「資源ゴミ分別収集ボランティア」活動を平成19年8月の2日、6日、16日、20日の4日間にわたり実施し、のべ246名が参加した。



- 6) 夏季休業期間中の課題として、生徒全員が「家庭での環境にやさしい取り組み」を計画・実践する。
- 7) 夏季休業1週間前に「お掃除頑張ろう週間」を設定し、普段清掃が行き届かない部分を丁寧に実施。
- 8) 各教室にリサイクルボックスを設置(古紙・プラ回収用)し、職員室、印刷室には用紙の裏面利用のための回収箱を設け、ゴミの分別と減量化に努めた。
- 9) 環境委員会が中心になり、水道や電灯スイッチの横に節水・節電を呼びかけるステッカーを作り掲示した。

5. 成果・効果

- 1) 大住クリーン作戦は、計画通り3回実施でき、環境委員会がクラスを中心にボランティアを募り、回を重ねるごとに、生徒の自主的な活動が見られるようになった。参加者も第1回は174名、第2回目が155名だったが、この助成のおかげで清掃用具の大量補充が可能になり、第3回は懸案だったほうき、竹みなどの清掃用具が充実し、参加者も200名を超えるという効果を生み出した。
- 2) 地元自治会の呼びかけに、今まで薄暗く、落書きだらけだった通学路の地下道に美術部や多くのボランティアの生徒が賛同し、のべ6日間かけて地域の方々と協力しながら壁画制作を行った。デザイン募集から下絵、そして色塗りと生徒達が苦勞しながらも半永久的に残るであろう見事な作品を制作できたことは、地域と共に生きる子ども達にとって大きな自信と励みになったと感じる。地下道も明るくなり地域の評判も良い。
- 3) 地元の環境を大事にし、守っていくために自分たちに何ができるかと本校の1年生達が地域の福祉協議会の方々の指導を受けながら何回も会合を開き、チラシ作りも含め「鈴川の清掃ボランティア」を計画し、実施した。当日はその考えに賛同した多くの2・3年生も積極的に参加し、両岸や川底に引っかかっているビニルや金属類を拾い上げ分別した。反省会でもこのすばらしい環境を守っていききたい等の感想が出された。

- 4) 資源ゴミ分別収集ボランティアについては、今回は多くの生徒が保護者とともにボランティアとして参加した。今夏は、活動日の気温も40℃近い猛暑であったが、親子や職員、地域住民で仲良く会話しながら作業する姿が各収集場所で見受けられた。
- 5) 夏休みの課題としての「家庭での環境にやさしい取り組み」は、資源面においてはレジ袋や割り箸等はもらわない取り組みや節水面では、風呂の残り湯の有効活用、環境面では米のとぎ汁の活用やゴミを出さない家庭での取り組み等が提出され、学校から家庭への広がりを感じられた。同時に家族のアイデアやアドバイスなども生かされている例も見受けられ、子どもにとっても環境に対する意識の高まりが見られる場合もあった。
- 6) 校内における節電や節水、分別回収などは、徐々に生徒の意識も高まり、ごく日常的に取り組みがなされるようになった。また、清掃活動も清掃用具の充実により生徒も楽しんでできるようになってきた。

6. 所感

今回の環境教育助成を受け、本校は、昭和50年に市街化調整区域内に学校が開校した。以来、30年以上にわたって同じ環境の中に学校が存在している。田んぼには小サギなど多くの野鳥が飛来し、変わらぬ環境を保っている市内でも数少ない学区である。そんな中「鈴川の清掃ボランティア」を自分たちで計画し、実施した生徒達は、川底の石に引っかかっているビニルを何枚も自作の道具で取り除くと、しばらくして何羽もの野鳥が川に集まってきたことに気づいた。それは、石の周りにへばり付いていたビニルが取り除かれ、魚のえさとなるコケ等が現れ、川魚たちが活発に活動し始めたためと地元のお年寄りから教えてもらった。見ると川には沢山の川魚が泳ぎ回っていることに子どもたちはびっくりしていた。作業後の反省会では、自分たちの地元はまだまだ元気に生きているし、これからも守り続けていきたいという発言が聞かれたことが印象的であった。

7. 今後の課題や発展性について

今後の課題は、本校の生徒は清掃活動や分別回収等は意欲的に行うようになったが、基本的な環境問題を考えると、「ゴミを出さない」「ゴミを減らす」努力や工夫がまだ不足しているように思われる。

しかしながら、夏休みの課題としての「家庭での環境にやさしい取り組み」では、家族のアイデアやアドバイスもあり、スローガンにも謳ってある地球全体の環境を考えた取り組みの提案も発表されている点は評価できる部分もあり、今後の継続と発展性も期待できそうである。

また、環境委員や学級ISO係の取り組みは評価できるもののさらに学級、学年、学校全体が環境についての意識を高め積極的な行動をとっているかという点はまだ不十分なのが実態であり、今後の課題と考えている。

さらに、今回本校が取り組んできた「大住クリーン作戦」をはじめ、「地下道の壁画制作」、「鈴川の清掃」、「資源ゴミの分別収集」等、すべて自分たちの意思によるボランティア活動に徹しながら取り組みを進めてきた。それにもかかわらず、高い参加率であったことは、今後の発展性という意味においては、これから生徒達が成長し、地域の担い手となる時代においてもその精神は持ち続けてくれる可能性があると考えられる。

8. 発表論文、投稿記事、メディアなどの掲載記事

特になし